



それぞれのあした^{いろ}彩

岡山県犯罪被害者支援大学生ボランティア連絡会

『あした^{いろ}彩』



目 次

1 はじめに.....	1
2 『あした彩』からの メッセージ.....	2
3 『あした彩』OB・OGからの メッセージ.....	3
4 被害者支援担当教授からの メッセージ.....	30
5 ご遺族からのメッセージ.....	34
6 『あした彩』写真集.....	36
7 『あした彩』SNSの紹介.....	40

メッセージは2019年夏に作成され、
原文のまま掲載しています。



はじめに

「私たちも被害者支援の活動がしたいです。」

ある大学で行った犯罪被害者支援に関する講義の直後、学生たちが、目を輝かせながら、講義を行った警察官に駆け寄ってきました。

あれから早4年。平成29年11月には、犯罪被害者支援大学生ボランティア連絡会「あした彩」が設立され、現在では、12大学2専門学校、300人を超える学生たちが、「学生の自分たちには、どのような支援ができるのか。」と日々考え、警察や行政では手の行き届かない分野の支援活動をボランティアとして行っています。

学生がボランティア活動を始める理由は様々で、就職に有利だからといった軽い気持ちで参加する学生もいます。しかし、その多くは、犯罪被害者や御遺族の話の聴講する度に心を動かされ、自分も御遺族等のために活動したいと心の底から思うようになります。

ある会合にあした彩の学生たちが大勢参加しました。学生たちが会場を後にしようとしたところ、客席にいた御遺族が、学生たちに向かって大声で、「日本の未来は明るい。」と笑顔で言ってくださいました。学生たちは涙を流し、御遺族に深くお辞儀をしました。

これは一例ですが、御遺族の講演だけでなく、こうした御遺族からの言葉や行動が、学生たちの心に深く浸透し、学生たちが自ら考え、行動する力になっています。

一方、「自分たちも御遺族のために何かしたい。」という小さくも熱く純粋な想いを胸に、学生たちが団結して活動している姿そのものが、御遺族を始めとした多くの人々の心に深く刻まれているものと思います。

私たちは、犯罪被害者や御遺族のために生き生きと活動している学生たちの姿、そして、学生たちの活動に感謝し自然と笑顔になっている犯罪被害者や御遺族の姿を目の当たりにしてきました。

現在、あした彩を卒業した学生たちは、様々な仕事に就き、あした彩で学んだことをそれぞれの場所で生かし、社会に広めようとしています。

学生たちが犯罪被害者支援活動を行うことが、社会にとってどのような意味を持つのか、そして彼らにとって犯罪被害者支援とは何なのか、その答えや彼らの想いを、このメッセージ集に散りばめられた彼らの言葉から感じ取ってくださることを心から願っています。

令和元年10月

岡山県警察本部警務部県民応接課犯罪被害者支援室



岡山県犯罪被害者支援大学生ボランティア連絡会
「あした彩」

私たちは、犯罪被害者遺族の方の講演会で

学生ボランティアの方には、それぞれの持っている
温かい心の絵の具で、闇に包まれた方の心のキャンパスに、
明日へと続く明るい道を描くお手伝いをお願い
したい

という言葉を受けました。

私たち学生にできることは限られています。

しかし、その言葉を聞き、真っ暗闇の中で苦しんでいる
被害者やご遺族の方の心を、明日、明後日、その後の未来へ
と続くよう彩ることが、私たち学生の役割だと思いました。

そして、少しずつでも、犯罪被害に遭われた方々の心の中
に、あしたの色を描いていきたいと思い、私たちは、「あした
彩」という名前で活動することに決めました。

私たちがこの活動をしていくことで、亡くなられた方々の
命が返ってくるわけではありません。犯罪が無くなるわけでも
ありません。

ですが少しでも、被害者やご遺族の心の支えでありたいと
思っています。

私たち学生ボランティアの力で、被害者やご遺族の方の心
のキャンパスにカラフルな「あした彩」をこれからも描いて
いきたいと思っています。



『成長（へんか）』

H30年度卒業
福祉器具販売会社勤務・男性

私は、ボランティア活動とは無縁の人間だった。この機会に正直に言う。私は、ボランティア活動に関わる人を小馬鹿にする人間だった。「自分の為に時間を使いたくないのか。僕にはやりたいことが沢山あるからボランティア活動を行うのは無理だ。」そのように考えて生きてきた。

その私が、犯罪被害者支援活動と出会い、ボランティアに対する価値観が180度変わり、今では夢中（とりこ）になっている。そんな犯罪被害者支援活動の魅力をここに少し綴ることにする。

思い返せば色々あった。この活動を通して出会う方々は、皆、息子や娘、大切な家族を集団リンチやレイプ、危険運転などの身勝手な犯罪によって亡くした遺族ばかりだ。それゆえ、当初、いかに接したらいいのか、悲痛な胸の叫びを私の中でどのように消化していけばいいのかわからない複雑な気持ちになった。遺族の思いを知れば知るほど、私に何かできることがあるのだろうか。私にはできることは無いのではと無力さを痛感する日々だった。私が楽しく生きてきた日本にもこんな世界があるのかと気づき、やりきれない気持ちになった。テレビの中の世界が一気にリアリティを帯びた。ひどい時には遺族の思いに共感し、入り込み、何日も胸がしめつけられ、何も手につかなくなり、大学にも行きたくなくなったこともある。

遺族講演会は、本当に想像を絶する残酷なものだった。聞く度に苦しかった。そのため、辞めようと考えたこともある。にもかかわらず、続けられたのは、遺族の方々の気持ちの変化を伝えてもらえたからだ。私たちは難しいことも、特別なこともしていない。ただただ、遺族の言葉に耳を傾け、同じ気持ちになり、学生にもできることを行ってきただけだ。そうすると、いつも死ぬことを考える程の真っ暗闇の中にいた、ある遺族の方から「笑えるようになりました。皆さん（あした彩）のおかげです。ありがとう、ありがとう、ありがとう。」

と伝えてもらえた。

その時、「そうか、私は、出会った遺族の方を笑顔にするためにこの活動をしているのだなって、目の前のこの遺族を幸せにするためにこの活動をしているのだな」って思った。すると、複雑な気持ちはなくなり、今では、「私がやるのだ。私がこの活動を発展させることでこんな思いをする人を出さない岡山を、日本をつくるのだ。」と使命感を持てるように変わった。そして、社会人になった今もこのように、この活動に、あした彩 OB として携わらせていただいている。

この犯罪被害者支援活動は、遺族の人生を変える活動である。人と触れ合うことの喜びや安心感を届け、家の中でかたく閉ざしていた人生から、再び社会に出られる人生へと変えていく。生きる希望や期待を与え、幸せに変えていくことのできる活動である。それと同時に、活動に携わる私たちの人生をも変えてくれる活動である。この活動を続けると感受性が豊かになる。生きていく中で、当たり前になってしまったことに喜びや幸せを再び感じる心を取り戻せる。すると、気付いた頃には、おまけもついて、そのような人間は社会で高く評価してもらえらしい。そのおかげで就職活動の際、この活動への思いを述べることで私は就きたい職業に就けた。他にも真剣に取り組んできた仲間は皆、望んだ進路に進めている。

したがって、この犯罪被害者支援活動とは、関わる全ての人の人生を大きく変えていく、そんな活動である。辞めようと思ったこともあるが、今となれば、こんなに素敵な活動に出会えたことに心から感謝している。だからこそ、より多くの人に知ってもらいたい。入り口、きっかけはなんだったっていい。まずは一度、あなたもこの活動に参加してみよう。



『犯罪被害者支援活動を行って』

H28年度卒業
警察官・男性

私は今まで、殺人事件等のニュースを見る度「犯人を許せない。遺族が可哀想だ。」そんな、ありきたりな感情を持っていました。ありきたりと言うより、どこか他人事のように思っていたのだと思います。

ですが、小学校教諭を目指していた大学3年生の頃、初めて、犯罪被害者遺族の講演を聴講し、ご遺族の当時の心情、苦しみ、怒り等の思いを直接聞き、衝撃を受け、自分に何かできることはないのかと、始めてそんな気持ちが芽生えたのです。

また、この時、犯罪被害者や遺族を専門で支援している被害者支援系の警察官と出会い、犯罪被害者支援というものがあることを知り、その警察官の方にサポートしてもらいながら、そこから約2年間、私は少しずつ被害者支援活動を行っていきました。

被害者支援活動をするといっても、最初は、何をすればいいのか、何ができるのか、全く分からず、どこかもどかしい気持ちでいました。

そんな時、その警察官の方から、「犯罪被害者や遺族の気持ちを知りたいと思うことが支援に繋がる」と言われ、私は、様々な犯罪被害に遭われたご遺族の講演会に足を運びました。

ご遺族は大切な人を奪われ、一生消えない心の傷を負い、思い出すことさえ苦しい中、涙を流しながら私たちに講演してくださいました。私は、ご遺族の気持ちを考えるだけでも胸が痛み、時には苦しくて夜、眠れないこともありました。

また、その気持ちに併せて、私は、

私たちには到底考えられないほどの苦しい思いをされているご遺族の方々が、なぜ、こんなにも頑張らなければならないのか。

と感じるようになりました。

私たち大学生でも、やれることはないのか、必死に考え、

できることはすぐにやっていました。

まず、最初に始めたことは、民間支援団体主催の被害者支援養成講座を受け、ご遺族に接する際に必要な知識や留意すべき事項等を勉強していきました。

また、学園祭で模擬店を出店し、その売上金を支援金に寄付したりもしました。

さらに、ご遺族の講演会が開催される予定を知ると、講演会の参加を呼びかけるチラシ配り等も行いました。

しかし、私は、ご遺族の方と直接関わっているわけではないので、私がやっている事が本当にご遺族のためになっているのかと思うこともありました。また、あるときは周りから、

ボランティアをやっていることに自分たちが満足しているだけだ

等と言われ、「私がやっていることは意味のあるものなのか」と不安に思うこともありました。

ですが、ある日、警察主催のご遺族が出席されるフォーラムに参加し、私たちがやってきた活動を発表する機会を頂いたのですが、そこで、ご遺族の方から、

事件が発生した当時、私は、出口のない暗闇をさまよっているような日々で、一家で心中し、娘のところにいこうと考えていました。

また、犯人が大学生だったことから、大学生のことが嫌いでした。

しかし、本日の皆さんの発表を見て、暗闇にいた私に勇気を与えてくれる、太陽の光を当ててくれているような気持ちになりました。

こんなにも私たちのために頑張ってくれている大学生がいることを知り、大学生の皆さんのことが好きになりました。

皆さんの活動によって前を向くことができました。

と涙を流しながらおっしゃってくださいました。

その時、私は初めて「私たちがやってきた活動には意味があったんだ、微力でも被害者の方々の力になれていたんだ」と実感することができ、涙が出ました。

もし、被害者支援活動に携わっていなければ、大学2年生

の頃までの自分のように、新聞やニュースを見ても、他人事のように思ったり、近くに苦しんでいる方がいるということにも気が付かず、もしかすると知らぬ間に、言動等で犯罪被害者の方を傷つけてしまっていたかもしれません。

被害者支援活動に携わったからこそ、毎日、普通に家族と接したり、話をしたり、友人と会ったり、遊んだり、当たり前のように、当たり前じゃない幸せ、ありがたさに気が付くことができました。

また、命の大切さや尊さを改めて理解し、人に対しての接し方、思いやりの気持ち等、自分の行動を見直す機会にもなりました。

犯罪被害者支援活動をすることができたのは、まず、

- 被害者支援係の警察官に出会い、犯罪被害者遺族がおかれている状況や支援活動等について詳細に説明を受けることができたこと。
- 講演会の日程を提供してもらい、様々なご遺族の講演会に足を運べたこと。
- 講演会に参加し、ご遺族の気持ち、心情や感情等を直接聞き、ご遺族の思いをダイレクトに感じとることができたこと。
- 何かをしたいと思ったとき、サポートしてくれる警察官や民間支援団体、大学の先生や、学生ボランティアという同志がいてくれたこと。

このような環境があったからこそ、できたことだと大変感謝しています。

最後に、当時、私はもともと、小学校教諭を目指していました。しかし、被害者支援活動に携わったこと、また、犯罪被害者遺族の方々が、ご講演で言われていた「これ以上、私たちのような被害者を出してほしくない」という思いを知ったことから、犯罪を抑止していける警察官を目指すことに決めました。

そして、現在は、地域の警察官として働いています。

これからも、警察官になった原点を決して忘れず、この気持ちを原動力とし、悲惨な事件や事故を未然に防ぎ、住民が安全で安心して暮らせる町づくりに貢献していきたいと思

ます。

また、ご遺族やご遺族の大切な人の思いを一生忘れず、その思いを、今後の世代、次の世代へと未来に受け継いでいきます。



『私の人生観を変えてくれた活動』

H30年度卒業
自治体職員・女性

私にとって、“犯罪被害者支援”とは、私の人生観を変えてくれたものであり、私にとっての“あした彩”とは、私の人生の宝物です。

被害者支援の活動に出会い、人のために何かをすることや、自ら考えて行動するということが、いかに難しいか知りました。

それでも、私たちにできることを精一杯やりたい！と必死に大学4年間頑張ったと胸を張って言えます。幾度となく壁にぶつかり、心が折れそうになったこともあります。

ですが、そんな時心の支えになったのは、被害者遺族からの言葉でした。

「大学生が頑張ってくれていることを知って、生きる希望が持てた。ありがとう。」

当時3歳だった大切な娘さんを大学生に殺害され、事件後家族みんなで死ぬことまで考えた遺族の方からの言葉です。この言葉をいただいた日の感動を私は一生忘れないと思います。

間接的な支援ではありましたが、私たちの活動は被害者遺族の方の支えになれているのだなと感じることができ、心から嬉しかったです。

また、この活動を通して様々な人と出会い、様々なことを学びました。今生きていることは奇跡であり、1日1日を大切に生きていかなければならないということのをこれからもずっと大切に生きていきたいです。

あした彩は卒業しましたが、これからも「あした彩 OB」として、犯罪被害者支援の活動に関わり続けていきたいと思っています。



『将来の夢を変えたあした彩』

H30年度卒業
警察官・男性

私が犯罪被害者支援ボランティアを始めたきっかけは、大学二回生の時、大学の教授から誘われたことにあります。

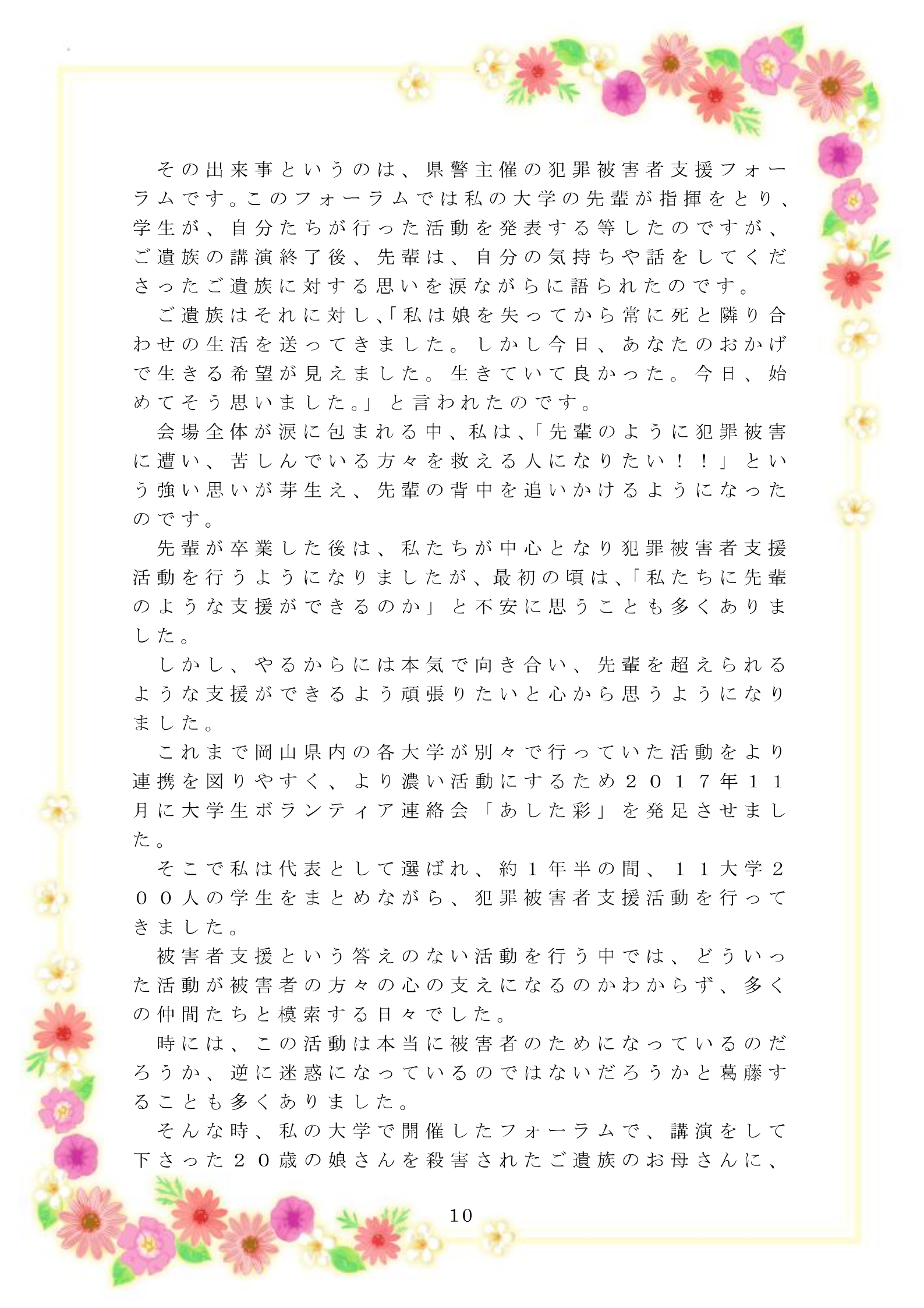
当時、私は小学校教諭を目指していたことから、「ボランティアを通じて子どもたちに命の大切さを伝えられたら」、また「ボランティアをしておくくと就活の際に有利になるのではないか」と思い活動に参加しました。

犯罪被害者支援について何も知らなかった私は、後にこの活動が自分の人生を大きく変えるとも知らず、少し甘い考えで参加したのです。

ボランティアを始めたばかりの頃の私は、何も考えずただ先輩の後に付いて行き、ご遺族の講演に足を運ぶだけでした。

しかし、ご遺族の話を聞く度、少しずつ私にできることは何か、少しでも犯罪の被害に遭われた方の力になりたいと思うようになりました。

そして、ある出来事をきっかけに、私の犯罪被害者支援活動に対する考え方は完全に変わったのです。



その出来事というのは、県警主催の犯罪被害者支援フォーラムです。このフォーラムでは私の大学の先輩が指揮をとり、学生が、自分たちが行った活動を発表する等したのですが、ご遺族の講演終了後、先輩は、自分の気持ちや話をしてくださったご遺族に対する思いを涙ながらに語られたのです。

ご遺族はそれに対し、「私は娘を失ってから常に死と隣り合わせの生活を送ってきました。しかし今日、あなたのおかげで生きる希望が見えました。生きていて良かった。今日、始めてそう思いました。」と言われたのです。

会場全体が涙に包まれる中、私は、「先輩のように犯罪被害に遭い、苦しんでいる方々を救える人になりたい！！」という強い思いが芽生え、先輩の背中を追いかけるようになったのです。

先輩が卒業した後は、私たちが中心となり犯罪被害者支援活動を行うようになりましたが、最初の頃は、「私たちに先輩のような支援ができるのか」と不安に思うことも多くありました。

しかし、やるからには本気で向き合い、先輩を超えられるような支援ができるよう頑張りたいと心から思うようになりました。

これまで岡山県内の各大学が別々で行っていた活動をより連携を図りやすく、より濃い活動にするため2017年11月に大学生ボランティア連絡会「あした彩」を発足させました。

そこで私は代表として選ばれ、約1年半の間、11大学200人の学生をまとめながら、犯罪被害者支援活動を行ってきました。

被害者支援という答えのない活動を行う中では、どういった活動が被害者の方々の心の支えになるのかわからず、多くの仲間たちと模索する日々でした。

時には、この活動は本当に被害者のためになっているのだろうか、逆に迷惑になっているのではないだろうかと葛藤することも多くありました。

そんな時、私の大学で開催したフォーラムで、講演を下さった20歳の娘さんを殺害されたご遺族のお母さんに、

自分の迷いの気持ちも含め、正直に犯罪被害者支援に対する思いを伝えたのです。

すると、「今日は本当にありがとう。ぜひ、あなたのような人に警察官になってもらいたい」という言葉をいただいたのです。

この言葉を聞き、私たちが行っている活動は間違っていないのだと確信することができるとともに、私たちが活動を行う原動力となっていきました。

そして私は、「小学校教諭として子どもたちに命の大切さを伝えることもいいが、警察官となりもっと多くの犯罪被害当事者の方を救っていききたい」という強い思いが芽生えたのです。そして私は今、岡山県警察の一員となり、多くの犯罪被害当事者の方を救っていくため、日々奮闘しています。私が立派な警察官となり活躍をすることが、これまで出会ってきた犯罪被害当事者の方への恩返しだと考えています。

犯罪被害者支援活動は、当たり前のように日々の生活を送れることが、どれほど幸せなことなのか、私に教えてくれました。私の価値観や人生観をも変えるくらい、大きな影響を与えてくれました。この活動を行っていなければ、今の私は存在しません。この活動があったからこそ、そして、多くの同じ思いを持つ仲間がいたからこそ、今の私は成り立っています。大学生から警察官となった今、立場は変わりましたが、犯罪被害当事者を救いたいという気持ち、犯罪被害者をこれ以上増やしたくないという気持ちは変わりません。しかし、そんな気持ちとは裏腹に悪質な事件は後を絶ちません。悪質な事件を起こさせないため、これ以上犯罪被害者を増やさないため、私はこれからの警察官人生を全うしていきます。



『被害者支援に参加して』

H30年度卒業
大学院生（臨床心理学）・女性

私が被害者支援に出会ったのは、大学2年生のころでした。県警の方の講義がきっかけで、当時、心理学を学んでいた私は、被害に遭われた方と関わることは、将来仕事をしていく上で貴重な経験になると思い活動に参加しました。

まだ、あした彩もサークルもできていない中で、被害者支援に携わるのは、本当に大変でした。講演会で被害者やご遺族の方の思いをお聴きするたび、何かやりたいという強い気持ちが湧き上がりましたが、どんなにやりたいと思っても、大学の名の下、1人で活動を進めることの限界にぶつかりました。また、他大学の活動と比べてしまい、理想と現実の壁、自分の中での葛藤で押しつぶされそうにもなりました。

けれども、強い思いを持って活動を続けた結果、大学4年の頃、大学でサークルを発足させることができました。サークルを作った理由として、何か形がないと今後受け継ぐ人がおらず、この活動が残らないと感じたからです。

本サークルは現在、「被害者支援ボランティアかみひこうき」となり、後輩達が自分達の思いを育みながら、本大学だけで行事の企画・運営ができるまでの大きな規模になりました。

私が、卒業まで、被害者支援を続けることができたのは、つらく、悲しい過去を思い出しながらも、何かを伝えようと一生懸命講演をしてくださった被害者やご遺族の方のおかげだと私は強く感じています。また、被害者支援活動に携わる中で多くの出会いがあり、多くのものを皆さんから学ばせていただきました。その中から4つを紹介させていただきます。

1つ目は、「ありがとう」という言葉です。様々な講演会に参加させてもらう中で、被害者やご遺族の方々は、今後同じような事件が起こらないために、涙をこらえながら、叫びたい思いを噛みしめながら、いつも私たちの前で話をして下さいました。私は、ただただ、話を聴くことしかできませんでしたが、講演者の方は「話を聴いてくださってありがとうございます。」といつもおっしゃってくださいました。本当に胸

が熱くなりました。私の心を動かしたのはいつも被害者やご遺族の方々のこの言葉でした。

2つ目に、一緒に活動する同志をもらいました。同期のリーダー、先輩、後輩、顧問の先生、そして、大学を越えた仲間達です。意見が対立することもありましたが、「被害者の方に何かしたい」という想いはみんな一緒だったと思います。話し合ったり、意見をぶつけることで理解し合える、そんな仲間巡りに巡り合えました。

3つ目に、リーダーという大役をいただき、想いの違う一人一人の意見を尊重しつつも一つにまとめ上げることの難しさを学びました。さらに、引退が近づくにつれ、次の世代にこの活動を受け継ぐことの大切さや難しさも学びました。

4つ目に、心理職に就き、今後被害者支援に関わることがあるとするなら、早期介入が必要だということを知りました。心は目で見えません。どれだけの傷を抱え、今何を考えているのかは誰にも分かりません。特に、被害に遭われた方は、心が傷ついているうえ、周囲の人からの言葉によっても更に傷つきます。被害者の方から、「いつも隣に死の穴があっいつでも飛び込める」「心理の支援が入るまでには時間がかかった」と聞いたことがあります。心理職は、来談から支援が開始されることが多いのですが、待っているだけでなく、日ごろから、各関係機関と連携を深めてネットワークを構築し、いち早く、対象の方と出会うことが重要だと感じました。

最後に、人はそれぞれ想いや価値観が違います。被害者等が望んでいないことを支援者側の立場でしてしまうのはただのエゴになってしまいます。重要なのは、相手が必要としていることを見極め、自分自身が潰れることなく、活動を継続することだと思います。この経験談が、少しでも被害者支援に興味を持っていただける機会になればと思います。



『仲間との出会い』

H 2 8 年 度 卒 業
警 察 官 ・ 女 性

私が学生ボランティアを知ったきっかけは、被害者支援フォーラムに参加したことでした。「私たちと同じ大学生がこんな活動しているのだなあ」と、興味本位で始めたボランティアでしたが、私の人生を変える活動となったのです。

私は、この活動に参加して何より良かったと思うことは、色々な人に出会えたことだと考えます。

普段、生活をしていると毎日のように悲惨なニュースを耳にします。さまざまな講演会に参加することで被害者遺族の方と出会い、ニュースでは伝わらない、遺族の方の声を直接聞くことができ、被害者支援の必要性について知ることができました。

このボランティアは岡山県内の大学生が集まって活動しています。被害者支援の必要性について、私たちにできることは何かを考えたとき、話し合いをする中で意見が食い違うことも多々ありましたが、それぞれの得意分野から、幅広い視点で考えることができたと思います。

また活動をする上で、警察との連携はなくてはならないものでした。私の中で警察官は、交通違反取締りや防犯指導をしているイメージが漠然とあったのですが、犯罪を未然に防ぐ活動だけでなく事件が起きてからの支援など幅広い分野があることをこの活動を通して知ったのです。中でも私たちの活動を一番近くで温かく見守ってくださった、かっこいい女性警察官と出会い、私も警察官になりたいと思うようになりました。

いざ、警察官になりたいと考えたとき、ボランティアの中には同じ方面に進みたいと考えている仲間もいました。お互いに励まし合いながら頑張ることができる仲間の存在は私にとってとても大きく、勉強の励みにもなりました。

私は今、警察官として交番で地域の安全安心を守る仕事をしていますが、大学生の頃の活動を踏まえ、いずれは被害者遺族の方の支援をする仕事をしたいと思っています。

あした彩卒業生はみんなこの活動で得たことを活かし、それぞれの道に進んでいます。卒業してもなおボランティア仲間との繋がりがあること、この活動を通して困り事や相談、それを打ち明けられる仲間ができたことを私は誇りに思っています。



『あした彩に出会って』

H28年度卒業
児童指導員・男性

早いもので『あした彩』の活動に参加していたのは3年前になります。

当時は『あした彩』という名前もなく、ただ、自分たちで犯罪被害に遭われた方の力になりたい、何か自分たちにできることがあるのでは・・・と思い集まった学生の集団でした。

私は当時在籍していた大学で警察の方の被害者支援の講義を聞き、この活動に参加したのですが、なんと、私の大学からの被害者支援ボランティア参加者は私1人でした。(現在では30人を超えています)

しかし、私は被害者支援への関心が強かった為、不安もありましたが、一人で他大学の方と一緒に活動に参加する事を決めました。

不安がある中でも同期の学生がいたのは続けられた理由の一つです。

でも、一番の理由は、参加者全員が同じ想いの元に集まった同志だったからだと思います。

学生集団なので様々な意識の差はありました。

その中で私が感じたのは、意識の差にある根底には、一人一人の被害者支援活動の形があったということです。

そんな大それた事は考えていない…と言われる方もいるかもしれませんが、私は1年の活動で一人一人から被害者支援への様々な熱意を感じる事が出来ました。

そして、その熱意を感じられる空間がとても心地良かったです。

ありがとう。

被害者支援活動と現在の自分がどう繋がっているかと言えば『命を大事にする』という意識ではないかと思います。

現在、私は児童養護施設で心に傷を負った子ども達と共に生活しています。

活動を通して困っている人を助けたいという思いは強くなり、結果的には今に繋がっていると思います。

今、活動をしている学生に伝えたいのは、その活動が今か、未来のどこかで誰かを助ける事に繋がると言う事です。

綺麗事でも良い、人としての美しい心を持ち続け、今後の活動を頑張ってもらえたらと思います。

たくさんの素晴らしい友人と巡り会えたこと、そして、多くのご遺族と出会えたことが、今の私の財産です。





『あした彩』

H30年度卒業
会社員・男性

私は大学一年生の時に、警察の方の講義を聞いたのがきっかけで被害者支援の存在を知りました。

講義を聞いた私は、何か自分に出来ることはないのかと考え、友人と共にボランティアに参加しました。

初めは色々な方の講演会やセミナーに参加し、犯罪被害者の気持ちや考え方について学んだりしましたが、どのような支援をしたら良いのか正直分かりませんでした。

しかし、活動をしていく中で他大学の学生ボランティアと徐々に連携を取ることができ、自分たちは犯罪被害者や被害者遺族の存在を一人でも多くの人に知ってもらおう事が、学生ボランティアとして大切なのではないかと、自分の意思を明確にすることができました。

また、被害者支援のボランティアに参加したことで、協力することの大切さや協力することで出来る支援の幅が広がることも実感しました。

そして、大学三年生の時に「あした彩」ができ、また、大学でも被害者支援サークル「つぼみ」を発足する運びとなりました。

こういったことで、自分がしてきた活動が、いかに必要とされているのか、強く感じることができました。

4年間のあした彩の活動を通して私が一番大切に思うことは「知ろうとする」ことではないかと思います。

何事にも興味を持ち知ろうとすることで、自分自身の幅を広げることができ、気持ちに余裕が生まれる為、人を思いやることができると思います。

今後は、社会人として、そして、誰にも自信を持って言える「あした彩OB」として、今まで感じたことや体験したことを伝えたり、自分ができることは何かを考え、犯罪被害に遭い、苦しんでいる方々の力に少しでもなれるよう、行動をしていきたいと思っています。

『私にとってのあした彩』

H30年度卒業
警察官・女性

私は、大学4年生のときに犯罪被害者支援について知りました。

そして、私は今、京都府警察学校に入校しています。

あした彩は、私にとって、人生の岐路において、とても大きなきっかけを作ってくれました。

あした彩に参加していなければ、そして県警のFさんと出会っていなければ、警察官として働く私はいませんでした。

講演会で遺族の方のお話を聞き、私も身近で被害者を支えられる人になりたい、もっと多くの人に遺族の話を知ってほしいと思いました。

また、同年代の人と一緒に活動する中で、いろいろな人のアイデアや行動力に触れ、被害者のためにもっと色んなことができるようになりたいと思いました。

そして、女性警察官として働くFさんを見て、強くて優しい、遺族の方からも府民からも頼られる警察官になりたい、と思いました。

私は、あした彩の活動を通して、初めて自分の人生の夢、目標を得ました。

「警察官は人生だ」と言いますが、その人生をくれたのがあした彩です。

今後も、警察官としてしっかり学び、経験し、府民から頼られる警察官になるために、努力します。





『あした彩に教わったこと』

H30年度卒業
運輸業会社勤務・女性

大学の講義で警察官の方の講演を聞き、犯罪被害者支援の活動を初めて知りました。これを機に、興味を持って始めたボランティアですが、本当に多くのことを学びました。

初めて大学でボランティアとして開催したシンポジウムでは、武るり子さんにご講演いただき、その時の、「興味を持つことが大切だ」という言葉を今でも鮮明に覚えています。

私は、このボランティアを知らなければ、日々流れるニュース等で事件を見て、ひどいことが起こったのだなと思っても、他人事と考えて、被害者や遺族の方の気持ちについて何も考えず、無関心のまま過ごしていたと思います。

しかし、あした彩の活動をしてきて、様々な方のお話を聞き、活動を見て、今はニュースで事件を見ると、今の自分にできることはないか考え、できることがあれば、少しでも被害者や遺族の方の支えになればいいなと思い、実践しています。

あした彩として活動した時間は、長くはなかったのですが、この活動に関われたことにととても感謝しています。

中でも私は、音楽隊「Over the Rainbow」として、ご遺族の方に音楽を届ける活動もさせて頂きました。ご遺族の方の思い出の曲を、演奏することから、毎日毎日、一生懸命練習しました。

また、他大学の方と一緒にやることから、音を合わせるのが非常に難しかったのですが、全員が、ご遺族に少しでも穏やかな気持ちになって頂きたいと思い、練習しました。

当日は、演奏しながら、目の前で、涙されるご遺族の姿を見て、全員心が一つになったと感じました。

この時、感じた熱い気持ちは、これから先もずっと忘れることはないと思います。

今は、他県に就職していることから、「あした彩」の活動に直接参加することは出来ませんが、これからも、何かしらの形で犯罪被害者支援に関わり続けたいと思います。



『答えは見つからず…』

H 2 9 年 度 卒 業
看 護 師 ・ 女 性

きっかけは高校生の頃に図書館で見た一冊の本でした。紫色に輝く表紙にインパクトがあり読みました。犯罪被害者の方と加害者についてのルポルタージュでした。今より法律が整備されていない時の犯罪被害者の方への過剰な報道活動や、加害者の状況を知りたくても知ることが出来ない状況について鮮明に描かれていました。興味を持ち、高校の図書館にあった犯罪関連の本は全部読んだと思っています。知識になっているかは分かりませんが…。

興味を持って調べていたことでしたが、進路選択ではあまりにも文系科目が苦手な理系になり、看護学部を選びました。

大学生になり、自分も何か出来ることをしたいと考えていたところ、大学の講演会で警察の方の被害者支援の講義を聞きました。岡山県警察に犯罪被害者支援室という部署があること、また、私たちが知らない色々な支援があることを初めて知りました。

私は、この講義を受け、もっと被害者の現状を知りたい、被害者や遺族の方々の気持ちを知りたいと、色々な講演会に足を運びました。悲しい事件を経験した犯罪被害者や遺族の方から語られる思いは、毎回、私の心に刻み込まれていきましたし、どんな立派な本でも学ぶことができない、大変貴重な経験となりました。

遺族の方が涙を流しながら、必死に話をされている姿や、自分たちと同じ思いをする人を一人でも出さないために熱心に活動されている姿を見て、私は、たくさんのパワーをいただきました。

また、この活動を行う中で、他大学の積極的な犯罪被害者支援活動を知ることが出来ました。

そして、大学では、フォレンジック看護という暴力や犯罪被害者の方を対象とした新しい看護の分野が少しずつ築かれているということを知り、私はその分野の勉強も一生懸命しました。

被害者や遺族の方のお話を聞かせて頂いたからこそ、できる支援があると思ったからです。

看護師になった今でも、私にできることは何かを、今もずっと考えています。しかし、今でも、答えは明確には見つかっていません。

しかし、私は、被害者の方々の勇気や努力を無駄にしないよう、これからも学び続けていこうと思っています。



『支援する側にもされる側にも広がる笑顔』

H30年度卒業
薬局勤務・女性

私が犯罪被害者支援を知ったのは、大学で女性の人権について考える授業の特別講義で、警察官の方から、お話を聞いた時です。

「被害者を支援できることならしたいけど、何をすればいいかをすればいいか分からない」

そんな気持ちを抱いたまま聞いた講義でした。

しかし、被害者の方やそのご遺族の方の置かれた状況について、お話を聞くうちに、涙が止まらず、講義が終わった時には、「私も一緒に被害者支援の活動を行いたい」と心を突き動かされた自分がいました。

一人では何をすればいいのか想像すらできなかった支援も、みんなでアイデアを出し合ったことで、実現させた支援がたくさんありました。

ご遺族の方の夢を叶えたり、農作業のお手伝い、交通事故で亡くなってしまった同級生がいる小学生たちとダンスを踊ったりもしました。

実際に支援をしてみても感じたのは、被害者の方やご遺族の方は、腫れものに触るような特別扱いをされることを求めているということでした。

被害者が感じる特別感とは、時に疎外感を与えてしまい、さらに心の傷を深くしてしまうのではないかと思います。

これは絶対に避けなければならないことです。

犯罪被害に遭われた方々は、「被害者」や「遺族」というフィルターを通さずに、普通に接してほしいと思っていることを、講演会や支援活動を通して知ることができました。

ご遺族の方のメッセージで、印象に残っている言葉があります。

「苦しみを与えるのも、支援を行い心の傷を癒していくのも人」

自分もそのどちらにも当てはまるのだと気付かされ、非常に衝撃を受けました。

被害者の方々は、心に傷を負い、人に会ったり話したりするのも苦しい状況にもかかわらず、私たちのために講演会では、辛さや悲しみ、ご家族のことやご自身の考えなど、様々なことを話して下さいます。

このご遺族の勇気を、そして、それを聞いた自分の責任の重みを、講演を聞くたびに感じていました。

現代はあらゆる分野で機械化が進んでいますが、犯罪被害に遭われた方の心のケアや支援は機械化できないと、実際に活動に参加してみて実感しました。

機械化が進む時代であっても、心に傷を負われた方への支援は、心を持った人同士が、繋がり合うことでようやく成立するのではないかと考えます。

通っている大学はもちろん、将来の夢も十人十色だったあした彩のメンバーに共通していることは、「犯罪被害に遭われた方の力になりたい」という強い意志だと思います。

だからこそ、真っ黒になってしまった被害者の方々の心のキャンパスを、明日へと続く明るい光のような色に塗り替える活動ができたのではないかと感じています。

もし、あした彩に参加していなかったら、毎日のうのうと生活していくままだったと思います。

ニュースで犯罪被害の報道を見て、かわいそうだなと思っても結局何もしないまま事件のことを忘れていくだけだったかもしれせん。

あした彩に参加したことで、傷ついた人に寄り添う難しさや、寄り添った結果、被害者の方やご遺族の方が笑顔を見せてくれたときの喜びを知ることができました。

とても貴重で、今後の人生にも影響を与えるような機会をくれたあした彩には感謝の気持ちでいっぱいです。

犯罪被害者支援は断片的でなく、継続的に続けることが不可欠であると思うので、今後もあした彩OGとして参加していきたいと思います。



『誰かを守れる人になれ』

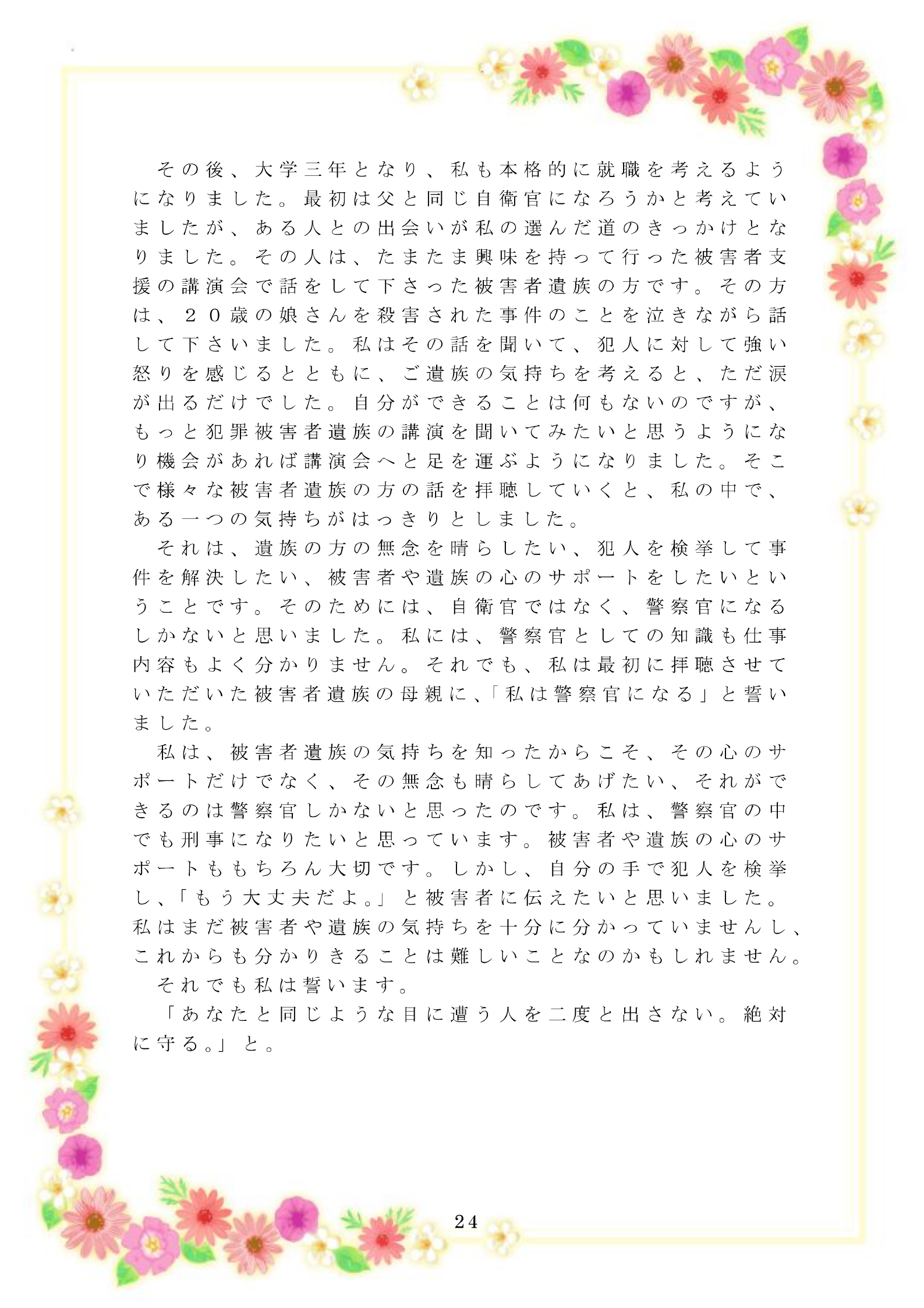
H30年度卒業
警察官・女性

これは、私を変えてくれるきっかけとなった父からの言葉です。

幼い頃の私にとって、憧れの存在はずっと父でした。私の父は陸上自衛官です。父は日本国内だけでなく、時には海外にも派遣され、被災地などの最前線で働いていました。誰かのために命をかけて働いている父は、私にとっての自慢の存在で、そんな父のような強い人になりたいと私も思うようになりました。

ですが、そんな思いとは裏腹に、私は自分の意見もはっきり言えず、小学校でもいじめられるようになりました。ある日、いじめの対象が私から、仲の良かった友人へと移りました。私は、それを「よかった」と思ってしまったのです。私は自己嫌悪で涙が止まりませんでした。そんな様子を見ていたのか、父から学校の話を持ちかけられ、そのいじめの話をしたのです。すると父は、「自分も同じ経験がある。その時の思いがあるから今、自衛隊で誰かを守る仕事をしている。おまえも誰かを守れる人になれ」と話してくれました。

私はその言葉を聞いて、憧れていた父が私と同じだったことが嬉しく思えた上、自分も変われるんじゃないかと思ったのです。次の日、私は、いじめっ子に初めて「やめて」と思いつき言ってやりました。それから少しずつ変わっていき、私の代わりにいじめられた友人からも「ありがとう」と言ってもらえたのです。その時、私の中で「誰かのためになる」ということが、将来の夢になりました。



その後、大学三年となり、私も本格的に就職を考えるようになりました。最初は父と同じ自衛官になろうかと考えていましたが、ある人との出会いが私の選んだ道のきっかけとなりました。その人は、たまたま興味を持って行った被害者支援の講演会で話をして下さった被害者遺族の方です。その方は、20歳の娘さんを殺害された事件のことを泣きながら話して下さいました。私はその話を聞いて、犯人に対して強い怒りを感じるとともに、ご遺族の気持ちを考えると、ただ涙が出るだけでした。自分ができることは何もないのですが、もっと犯罪被害者遺族の講演を聞いてみたいと思うようになり機会があれば講演会へと足を運ぶようになりました。そこで様々な被害者遺族の方の話を拝聴していくと、私の中で、ある一つの気持ちがはっきりとしました。

それは、遺族の方の無念を晴らしたい、犯人を検挙して事件を解決したい、被害者や遺族の心のサポートをしたいということです。そのためには、自衛官ではなく、警察官になるしかないと思いました。私には、警察官としての知識も仕事内容もよく分かりません。それでも、私は最初に拝聴させていただいた被害者遺族の母親に、「私は警察官になる」と誓いました。

私は、被害者遺族の気持ちを知ったからこそ、その心のサポートだけでなく、その無念も晴らしてあげたい、それができるのは警察官しかないと思ったのです。私は、警察官の中でも刑事になりたいと思っています。被害者や遺族の心のサポートももちろん大切です。しかし、自分の手で犯人を検挙し、「もう大丈夫だよ。」と被害者に伝えたいと思いました。私はまだ被害者や遺族の気持ちを十分に分かっていませんし、これからも分かりきることは難しいことなのかもしれません。

それでも私は誓います。

「あなたと同じような目に遭う人を二度と出さない。絶対に守る。」と。



『あした彩でできること』

H29年度卒業
児童指導員・女性

私は、卒業し、就職した現在でもあした彩の活動を続けています。続けていて良かったことは講演で知り合った遺族の方と今もなお、交流があること、また、自分たちの活動が後輩に繋がっていると講演会や懇親会に参加するたびに実感できることです。

この活動を始めたきっかけは、私が大学のボランティアサークルの部長をしていた時、教授から呼び出され、その後の私の学生生活を変えることとなった女性警察官を紹介され、興味本位でその女性警察官の講義を受けたことです。

その時に初めて、犯罪被害に遭い、苦しんでいる人が自分の周りにもたくさんいるかもしれないこと、そしてそういった人を支える“犯罪被害者支援”という活動があることを知りました。

その後、活動に参加してみると、様々な大学、様々な学科からたくさんの大学生がそれぞれに熱い思いを持って参加していることを知りました。

続けていくうちに人数もどんどん増えていき、私たちの活動を発表するような場も増えていきました。

そんな中で、私は、学生の活動発表を行う際に使用するパワーポイントを作成する係を担当することとなりました。

また、ある時には「遺族の方が、写真整理ができず困っている。DVDにまとめてもらうことはできないだろうか」と言われました。

当時、私は、自分たちが被害者支援活動をすることに意味があるとは思っていましたが、それでも、何をしたらいいのか、何を被害者や遺族の方が求めているかわからず、悩んでいたのも、遺族の方が、求めているのならば、やってみようと思ったのです。

私は、遺族の方が少しでも喜んでもらえるならと、音楽を入れた動画を作成することにしました。

預かった写真には、私より1つ年上のお姉さんの写真があ

りました。1枚1枚に思い出があるのだなと思うと、辛くてたまらない感情にもなりました。

また、私は大学時代に「まおちゃんの新しい靴」という紙芝居を作成しました。これは、交通事故遺族の方の講演を聴講し、多くの人に命の大切さを伝えたいと思ったからです。

遺族の方は、この紙芝居を見て、涙を流しながら、感謝の言葉を言って下さいました。

また、現在では、ネットニュース等に掲載されたこともあり、たくさんの人から問合せがあり、多くの方に活用して頂いています。

そして、私たちは、ゼミ旅行で遺族の方を尋ねたりもしています。

時には事故現場に行き、献花をさせていただいたりもしています。こういった活動をすることで、私たち学生の意識が高まることはもちろんですが、おこがましいかもしれませんが、遺族の方に少しでも、勇気を与えることができたらなと思っています。

私は大学を卒業した現在も、自分の夢であった仕事をしながら、あした彩の活動を続けています。

被害者支援ボランティアは、決して大学生でなければできないことではなく、大学で学んだことを、社会に出た私たちが、広めていかなければいけないからです。

この活動については、就職先の人にも理解をしてくれ「とても素晴らしい活動だから、ぜひ今後も続けてほしい。」と応援してくれています。

この活動は“知る”から始まる活動だと思います。被害者、遺族の思いを知って下さい。私たちがなぜ、こんなに一生懸命しているのか、一緒に活動して知って下さい。決して後悔はしません。時には、熱い気持ち故に、意見がぶつかることもあります。でも、そんな体験も、今となっては、笑って話せる、いい思い出に変わっています。

そんな風に思えるのは、みんな一生懸命だからです。遺族の気持ちを知りたい、そんな興味でもいいんです。ぜひ私たちのことを、そして、あした彩の活動を知ってください。

私たちも興味を持ってくれたあなたのことを知りたいです。



『私の選んだ道』

H30年度卒業
警察官・男性

私は今、岡山県警察の一員として、岡山県警察学校で現場に出るために日々過酷な訓練と勉学に励んでいます。

私が警察官を目指すこととなったのは、大学生の頃、ある教授から「一緒に被害者支援ボランティアをやってみないか」という誘いを受けたことから始まります。

平凡な大学生活を送っていた私にとって、「犯罪被害者支援」という言葉は全く耳慣れない言葉でしたが、私は、何も分からないまま、そのボランティア活動に参加しました。

この活動を行ってみての一番の感想は、メディアは被疑者のことばかり報道し、あるところでは、被疑者の権利を主張しているが、被害者や遺族には少しの支援しかなされていないという、不条理な現状でした。この現実を知り、私は自分自身、もっとたくさんの知識を付けようと思い、積極的に遺族講演を聴講したり、街頭啓発活動に参加しました。

岡山では、大学生ボランティアの輪が広まり、大学の垣根を越えて一緒に被害者支援の活動を行っていますが、それでも決して多いと言える人数ではありません。私は、この活動を行う中で、もっと幅広い年代の方に犯罪被害者支援を知ってもらいたい、被害者や遺族の思いを少しでも広めたい、そんな思いが強くなり、そのために、警察官の道を選びました。

警察官として働くとなると、今までのようなボランティアではなく、仕事として多くの人と接することになります。警察官は凶悪な犯罪者を捕まえるだけでなく、被害者や遺族への適切な支援も必要となります。このような時に、ボランティア活動で学んだことを生かし、被害者や遺族の気持ちを汲み取りながら支援していきたいと思っています。

多くの遺族の方が、涙ながらに語られた言葉は、時間が経っても、決して私の心から消えるものではありません。

最後に、私は、被害に苦しむ被害者や遺族を出さないためにも、たくさんの経験を積み、熱い気持ちと積極性を持った、県民から信頼される警察官になります。



『私があした彩に参加して 勉強になったこと』

H30年度卒業
不動産会社勤務・女性

ご遺族の方の講演会を聞く度に、私は、複雑な気持ちになっていました。それは、事件の話をするということは、辛い記憶を思い出すことであり、そうしてまで、社会に訴えていかなければならないという現実を知ったからです。

それまでの私は、テレビで報道される内容で、全てを判断し、自ら被害者の気持ちを考えたことなどありませんでした。

私は、あした彩の活動に参加し、多くの講演を聴講することで、決して報道では知ることのできない被害者や遺族の方々の現状について、学ぶことができました。

そして、今の私にとって、多くのご遺族や他大学の学生と出逢えたことは、とても貴重な財産であり、あした彩の活動に参加していなければ、得られなかったことだと思います。

大学の犯罪被害者支援のサークル活動では、京都府亀岡で発生した交通事故のご遺族の話聴講し、紙芝居「まおちゃんの新しい靴」を作成しました。私たちは、幼稚園や小学校で、この紙芝居を広めていく中で、自分たちが亡くなった真緒ちゃんのことを知った上で、子供達に命の大切さを伝えたいと思い、京都を訪問しました。京都では、ご遺族の方が、実際に事故が起きた場所を案内して下さり、私たちは、コメントに献花もさせて頂きました。

また、私たちは、講演を聴講するだけでなく、講演終了後には、ご遺族の方と意見交換会を開き、講演では語られることのなかったお話を聞かせて頂いたり、自分たちの感想を伝えさせて頂いたりもしました。

現在、私は不動産会社に就職し、人と常に接する仕事をしています。なぜ、この職業を選んだかというのと、一番の理由は、あした彩の活動に参加したことです。私は、あした彩に参加するまでは、人と話をするのがとても苦手でした。しかし、活動を行う上で、ご遺族や他大学のたくさんの学生と話

をするというのは必須で、その経験をする中で、相手の気持ちを考えるということを通じて、その大切さを感じ、将来仕事に就くのならば、一緒になって何かを考える仕事に就けたらなと思ったからです。

今後私は、あした彩の活動で学んだことを生かし、少しでも社会の役に立てるよう、そして、微力かもしれませんが、大学生の頃のようにあした彩の活動にも積極的に参加していきたいと思っています。



『犯罪被害者支援の活動を通して』

H29年度卒業
社会福祉専門職・女性

私は大学時代、「犯罪被害者支援」の活動を行ってきた。「犯罪被害者」と一言でいっても交通事故被害者や性犯罪被害者、暴行・殺人等による被害者など様々で、その人その人に合った支援が不可欠である。

支援する上でまず、自分自身が被害者、遺族等の感情を知っておくことが大切だと思い、支援のあり方についても学んだ。講座等による理解も今後の活動をしていく上では重要なものだったが、やはり一番は「実際の声を聴く」ことであった。

「あの時、声をかけてくれたことで救われた」、「あの時、一言でも気遣いの言葉があれば…」など様々な思いを聴くことできた。

そういった思いを聴き、「広く社会に伝えていくこと」が大切であり、その積み重ねが犯罪被害者の理解に少しでも繋がっていくのではないかと思う。

私は現在、社会福祉士として、「地域福祉」を進める立場にある。地域の中には、大切な人を事件や事故で亡くした方、実際に被害に遭われた方、また、何らかの支援を求めているが相談場所が分からない方など、私がまだ知らない部分に埋もれているかもしれない。

私は今後も、そういった方々の「心のケア」や必要な情報

提供などを積極的に行っていきたいと思う。

テレビのニュースなどでは、事件や事故の状況、被害者・被害者遺族の情報などは大きく報道されることがあるが、その後の生活に焦点を当てることはほとんどないように感じる。特に少年犯罪の場合、加害者側は匿名性が保たれていると感じる人も少なくない。こういったことから被害者・被害者遺族は精神的に追い詰められてしまう。

安心できる場所・一緒にいると元気をもらえるような存在…。これらを実現するためには、様々な団体・機関が連携することが必要だと、これまでのボランティア活動から学んだ。

「一人一人の力は小さくても、集まれば大きな力になる」

私は、被害者・被害者遺族の思い一つひとつに寄り添い、誰もが暮らしやすい地域づくりを進めていきたいと思う

「犯罪被害者支援シンポジウム」の開催を通じて知ったこと —地域でつながる大学生と専門家の力—

元・大学地域総合研究所研究員

私が昨年まで勤めていた大学では、岡山県警察本部犯罪被害者支援室のご指導・ご協力の下に、平成26（2014）年10月から毎年「犯罪被害者支援シンポジウム」を開催しています。私は第1回から第4回まで裏方を担当し、その経験を通じて二つのことを知りました。

一つは、大学生の素直さと実行力です。大学教職員は、学生にシンポジウムやボランティア活動に参加してもらおうと、さまざまな目的を示します。被害者支援の仕組みを知れば現代社会で生きる力が身につく、多様化する警察の仕事の内容も学べる、等々。しかし、大学生の行動は、そのような理屈を飛び越えていきます。被害者のご講話と、県警の女性警察官のお話に心を動かされた大学生は、まっすぐその女性警察官のところへ行き、自分たちにできることはないかと尋ねます。若い人たちは、苦しんでいる方々を助けたいという思い

を、何と素直に表現し実行できることでしょう。今年も多く
の学生が集まってくれた、こんなアイデアが出た、とその女
性警察官から伺うたびに、大学生が単なる啓発活動を超え、
被害に苦しむ方一人一人のために行動し始めるのを感じます。

もう一つは、地域で実践する専門家の力です。いくら大学
生に実行力があっても、犯罪被害者支援は専門家の指導や助
言なしにはできません。女性警察官のリーダーシップの下で、
岡山の大学生は犯罪に巻き込まれた方々と直に交流し、成長
してきました。またシンポジウムには地元の法曹や、研究者
が参加し、大学生と語り合ってくださいます。被害者のお話
を聞き、専門家と接することで、大学生だけでなく教職員も、
犯罪被害という社会問題に改めて気づきます。そして、苦し
む人々を支援する専門家の存在に目を開かれる思いをしています。

平成28年のシンポジウムで、臨床心理士でもある大学の
教授は次のように述べられました。

「今日集まった人はみんな仲間です。岡山県にはたくさん
の信頼できる資源があることを思い出し、困っている人をみ
んなで支えていく風土を醸成しましょう。」

専門家も大学生も仲間だというお言葉は、岡山の大学生・
教職員にとって心の支えです。

これからも、この言葉のとおり、学生たちが手を繋ぎ、肩
を組み、犯罪の被害に遭われた方の心に寄り添い、そして自
分自身を高めていってくれることを期待しています。



『教師も一緒に育つ』

大学助教授・男性

自分は教師をしている。早いもので、子どもたちの前に立つようになって今年で36年になる。人生の約3分の2を教師として過ごしてきた。今振り返ると子どもたちに育ててもらった36年であった。そして、子どもたちの親や祖父母、地域の人たち、また教職員の仲間たちと、本当に多くの人たちとの関わりの中で多くのことを学ばせてもらい今があると感じる。私自身、ずっと教師という職業に憧れ、教師になった。また育ってきた環境から教師は子どもたちに教え、子どもたちはそれを聞くものだと思ってきた。しかし現実とは違った。教師という職業は人に教えるだけではなく、自分が教える以上に自分自身が学ぶことがたくさんあった。また、自分の学ぶ姿勢が強ければ強いほど、子どもたちの学ぼうという姿勢が強くと表れていると感じた。

私は教鞭を執る傍ら学生指導の業務も行っていた。日々発生する学生の学内外の事件や事故対応、処理に走り回っていた。その時、学生達より「何かお手伝いできることはないですか」という一言を聞き、事件事故の発生後の処理ではなく、未然に情報を得、予測し回避出来ればと考え、学生たちに学内外の安全安心を守れる学生ボランティアチームを設立。それが今の「爽志会」の前身である。正に、加害者にも被害者にもならない、それが今、私が取り組んでいる「犯罪被害者支援」の原点となった。

そのきっかけになったのが、私が勤務する大学の所轄警察にいた女性警察官との出会いであった。最初は生活安全課におられ、学生が生活する中で起こる諸問題について指導頂いていた。しかし、その指導は違っていた。事務的に処理するのではなく、子どもたちと膝を向け合い、人としてどうあるべきなのかを諭すその姿は警察官ではなく、一人の人間としての言葉の数々であった。教師でない人間が学生を育ててくれている。「凄い。ありがたい」そう思っていた矢先、「犯罪被害者支援室」に異動された。私は当時、犯罪被害者支援という言葉を知らなかった。初めて聞く言葉にその女性警察官

に色々教えて頂いた。驚きの連続であった。

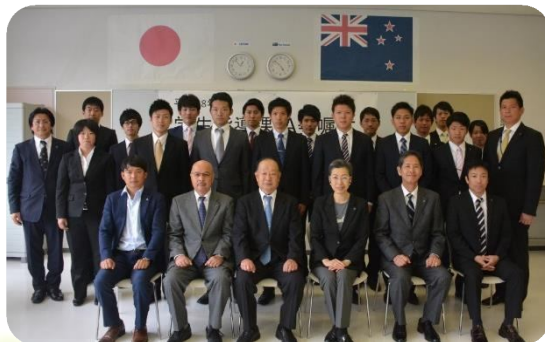
加害者については報道されても被害者、まして遺族のことなど報道もされない、全く皆無の世界。どれだけ被害者本人、遺族が悩み、苦しみ生活しているか、初めて知った。何かできることはないのか、考えた時にその女性警察官から「やれることはたくさんある。若い力が必要」と言われ、早速学生に話をしてもらった。遺族からも話を頂いた。

恐れたのは、かわいそうで終わらないかであったが、その期待は完全に裏切られた。学生から出たのは、まず多くの人に知ってもらおうという思いから「拡散」を合言葉に若い世代を中心に直接遺族の方から想いを聞く、フォーラムを継続的に開催、それが「広げよう犯罪被害者支援の輪 in IPU」である。

毎回350名を超える方々が参加、延べ合計2700名を超える方々にその想いを伝える活動、また遺族の方々に直接会うことにより遺族がして欲しいこと、学生がしてあげたいことをお互いが模索し形を創っていく、素晴らしい活動が生まれていった。

しかし、そこに至るに、コーディネートする人間がいなくてはならない。そのコーディネーターこそ、その女性警察官であった。休みを返上し、また仕事が終わってから学生たちと、とことん話し合う。この警察官の活動が徐々に学生たちの自主性を生んでいった。中には自分も警察官となって加害者も被害者もつぐらない、また被害者に寄り添える警察官になると志願、今、正に警察官として現場で取り組んでいる者や、教師として学校現場で頑張っているほどに成長した。

この活動が将来の自分の生きる道を決めるほどの影響を与え、そして、それが生きる糧となり、目標になっている。岡山県の学生でつくる「あした彩」が正にその集大成であると考える。



『母さんも、愛してるよ。』

岡山県在住ご遺族

「あした彩」結成二年、大学生ボランティアの皆様、あした彩OBの皆様、関係者の皆様、いつもたくさんのご支援、ご配慮をいただき深く感謝致します。

「母さんも、愛してるよ。」は、娘が生前、家族それぞれに「愛してるよ。」とノートに遺した走り書きに、私が娘に呼応し続けている言葉です。

私は二年間、「母さんも、愛してるよ。」と題して、大学・専門学校・警察署などで話をさせていただいています。

いち母親としての私の娘への想い、被害者遺族の現状、これまでいただいていたたくさんの心温まるご支援に対する感謝の気持ちを、大変未熟ではありますがお伝えさせていただいています。

例え、未熟でも稚拙でも、前に出て話すことが、今できる私の最大のご恩返しだと思っていますし、これからのため、少しでもお役に立てますことを願っています。

二年前、初めて話を聞いていただいたのが、ある大学でのフォーラムでした。

裁判終了後一年と経っていない時でしたし、娘と同世代の皆様の前で話すことには抵抗がありました。

三百人を超える方々を前にするのも、不安で仕方ありませんでした。

そんな私の、今ふり返っても恥ずかしくなるような話にも、大学生ボランティア代表の方より、「僕達もお母さんのことを愛しています。」と言っていただきました。

この言葉は、皆様全員の純粋な想いと深く受けとめ、大変嬉しく思いました。

そして皆様との距離をなくし、今に至っているのだと思います。

私は、このフォーラムの中で、「皆様がそれぞれ持っている温かい心の絵の具で、闇に包まれて真っ黒に塗り潰された心のキャンパスに、明日へと続く明るい道を彩るお手伝いをして欲しい。」とお願いしました。

その後、更に多くの方が、ボランティア活動に加わって下さり、「あした彩」として、学業に、プライベートにお忙しい中、また、お小遣いやアルバイト代より、ボランティア費用を捻出して、継続した活動で、私たち遺族や被害者を支えて下さっていますね。

感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございます。

今、娘を亡くし四年が経とうとしています。

四年が来ても、今なお毎朝一人で涙を流し一日をスタートさせています。

でも、皆様とお逢いすると、私の心のキャンパスは、虹色になったり、キラキラになったり、いつもにこちゃんマークが点灯していますよ。

幸せな時間をありがとうございます。

どうぞこれからも、今持っている素直さ、純粹さ、一生懸命さを大切にしてください。

皆様の活動は、私たち遺族に力を与えて下さるだけでなく、皆様自身のこれからの糧となり人間力が養われることと思います。

私も皆様にいただいたパワーで、娘に恥じないよう生きてゆけたらと思います。

そしていつか娘と再会したら、「母さんも、愛してるよ。」といっぱい伝えます。

先輩から受け継がれた支援の輪がますます大きくなることを願っています。



2016



2017



2018



2019





あした彩 岡山

7月12日 · 🌐



7月6日(土)に吉備公民館にて川崎医療福祉大学被害者支援ボランティア「かみひこうき」による「かみひこうき会第1弾」を開催しました。

午前中は、警察の方をお招きし、シンポジウムを実施しました。まずは、清心女子大学の学生に大山さんの講演を聴いた感想を発表してもらい、全員で共有しました。私たちが日々当たり前で過ごしている日常はいつ当... もっと見る



あした彩 岡山

8月15日 13:36 · 🌐



7月13日(土)

岡山医療福祉専門学校にて学友会主催の「地域ふれあい祭」という学校行事がありました。そこで、岡山医療福祉専門学校でのあした彩の活動として「ひだまり」という名で活動させて頂きました。

交通事故で命を失った小学2年生のまおちゃんの事故を基にし、作成されたデジタル紙芝居「まおちゃん... もっと見る



他4件



あした彩 SNS サイト

活動の紹介をしています。ぜひご覧ください。

Twitter:『あした彩 (@ashitairo2017)』で検索 🔍

URL

<https://twitter.com/ashitairo2017?s=06>

Facebook:『あした彩 岡山』で検索 🔍

URL

<https://www.facebook.com/profile.php?id=100035968543299>

<https://www.facebook.com/people/あした彩-岡山/100035968543299>



知りたいと思うことが被害者支援の始まりです。

